

## エースを墮とせ～無名選手が王者を屈服させるまで～

### 目次

1. 第1話：挑発
2. 第2話：賭け
3. 第3話：逆転
4. 第4話：屈服
5. 第5話：均衡
6. 第6話：決着
7. エピローグ

### 第1話：挑発

笛の音が体育館に響き渡った瞬間、葛城遼の視界はスローモーションになった。コート上の選手たちの動き、観客席からの歓声、すべてが遠のいていく。ボールは遼の手を離れ、放物線を描いて相手ゴールへと吸い込まれていった。

ネットが揺れる。

タイムアップのブザーが鳴る。

「やった！」

「勝った！」

チームメイトたちが遼に殺到した。背中を叩かれ、頭を撫でられ、抱きしめられる。地区大会決勝戦、最後の最後で遼が決めた同点ゴールからの逆転。汗と興奮が入り混じった空気の中で、遼はただ静かに息を整えていた。

体育館の天井を見上げる。蛍光灯の光が眩しい。胸の中で何かが静かに燃えている。それは歓喜ではなく、もっと冷たく、鋭い感覚だった。

「葛城、すげえよ！」

「お前、今日 MVP 確定だろ！」

チームメイトの声が耳を通り過ぎる。遼は小さく頷いただけだった。視線はコートの反対側に向けられている。そこには、チームのエースである氷室蓮が立っていた。

銀髪。185センチの長身。引き締まった身体。整った顔立ち。氷室蓮は、このチームの絶対的な中心だっ

た。そして今、その蓮は、遼を見ていた。

表情は読めない。ただ、その視線には何かがあった。認めたくない何かが。

遼は目を逸らさなかった。二人の視線が空中で交差し、そのまま数秒間、動かなかった。

＊

更衣室は祝勝ムードに包まれていた。汗に濡れたユニフォームを脱ぎ捨てる音、シャワーの水音、笑い声。遼は隅のベンチに座り、黙々と靴紐を解いていた。

「葛城、お前ホントに成長したよな」

チームメイトの一人が声をかけてきた。遼は顔を上げず、小さく

「ありがとうございます」とだけ答えた。

「去年までは控えだったのに、今じゃチームに欠かせない存在だもんな」

「ダークホースってやつ？」

「まさにそれ！」

遼は黙ってユニフォームを脱いだ。汗が肌に張り付いている。Tシャツの下、鍛え上げられた腹筋が露わになる。小柄だが、無駄のない筋肉。バネのような身体。

ふと、視線を感じた。

顔を上げると、ロッカーの前で着替えている蓮と目が合った。蓮はすぐに視線を外し、黙々とシャツのボタンを外し始めた。

遼は立ち上がり、自分のロッカーへ向かった。蓮のすぐ隣だ。二つのロッカーの間には、わずか50センチほどの空間しかない。

遼がロッカーを開ける。蓮が肩越しに一瞥する。二人の距離は近い。遼の身長は172センチ。蓮の185センチと比べれば、明らかに小さい。だが、遼は決して萎縮していなかった。

「お疲れ様です、氷室先輩」

遼が声をかけた。蓮は無言でシャツを脱いだ。広い肩幅、盛り上がった胸筋、割れた腹筋。完璧な身体。それを誇示するかのように、蓮はゆっくりと動いた。

「今日のプレー、見ましたよ」

遼が続ける。蓮はタオルで汗を拭きながら、冷たく答えた。

「お前もな」

「俺の？」

「ああ」

短い会話。だが、その間に流れる空気は、妙に重かった。

遼はシャツを脱いだ。小柄だが、引き締まった身体が露わになる。筋肉の付き方が蓮とは違う。蓮が力強さなら、遼は俊敏さ。二つの異なる美しさが、狭い空間で並んでいた。

「氷室先輩」

「何だ」

「今日の試合、俺、結構活躍できたと思います」

蓮の手が止まった。タオルを肩に掛けたまま、遼を見下ろす。

「それで？」

「俺、もしかしたら……氷室先輩より上かもしれませんね」

更衣室の空気が変わった。周囲のチームメイトたちの会話が、一瞬、途切れたような気がした。

蓮の目が細くなる。唇の端が、わずかに歪んだ。

「何だと？」

低い声。威圧感。だが、遼は一步も引かなかった。むしろ、わずかに顔を近づけた。

「今日の試合、決めたのは俺です。氷室先輩じゃない」

「お前……」

「もちろん、先輩の実力は認めてます。でも、今の俺は、先輩に負けてないと思います」

蓮の顎に力が入る。拳が、わずかに震えた。遼はそれを見逃さなかった。

「どうですか、氷室先輩。俺と……一対一で勝負してみませんか？」

蓮は答えなかった。ただ、遼を睨みつけるだけ。その視線には、怒りと、そして何か別の感情が混ざっていた。

遼は小さく笑った。挑発的な、それでいてどこか挑戦的な笑み。

「怖いですか？」

「……舐めるな」

蓮が低く唸った。遼はロッカーからタオルを取り出し、シャワールームへ向かった。蓮の横を通り過ぎる際、わずかに肩が触れた。

その瞬間、電流のような感覚が走った。

遼は足を止めなかった。そのまま、シャワールームの扉を開けて中に入る。背後から、蓮の視線を感じていた。

＊

シャワールームは個室が並んでいるタイプだった。遼は一番奥の個室に入り、扉を閉めた。蛇口をひねると、冷たい水が身体に降り注ぐ。

目を閉じる。今日のプレーが脳裏をよぎる。ボールをキャッチする感触、コートを駆ける感覚、そしてあの最後のシュート。すべてが完璧だった。

そして、蓮の顔。

あの表情。認めたくない、という色。悔しさ。そして、何か別の……。

遼の唇が、わずかに歪んだ。

シャワーを浴びながら、遼は自分の身体を見下ろした。小柄だが、鍛え上げられた筋肉。この身体で、あの太柄な蓮に勝った。

……勝ちたい。

もっと。

もっと。

遼の中で、何かが燃え上がっていた。それは競技への情熱ではなかった。もっと原始的な、もっと暗い衝動。

蓮を……屈服させたい。

あの完璧な身体を。あのプライドを。すべてを。

シャワーを止め、タオルで身体を拭く。個室を出ると、すぐ隣の個室から人が出てきた。

蓮だった。

二人は、狭い通路で向かい合った。蓮は上半身裸、腰にタオルを巻いただけ。濡れた髪から水滴が滴り落ちる。遼も同じ格好だった。

距離は、わずか1メートル。

蓮が口を開いた。

「葛城」

「はい」

「お前、本気で言ったのか」

「何をですか？」

「俺より上だと」

遼は蓮の目を真っ直ぐ見た。

「はい。本気です」

蓮の顎が、わずかに持ち上がった。見下すような角度。だが、その目には、ただの怒りではない何かがあった。

「いいだろう」

「え？」

「勝負してやる。お前が望むなら」

遼の心臓が、強く脈打った。

「本当ですか？」

「ああ。ただし……」

蓮が一步、近づいた。遼との距離が、50センチになる。蓮の濡れた肌から、熱が伝わってくる。

「ただし、賭けだ」

「賭け？」

「お前が勝ったら、俺はお前を認める。だが、俺が勝ったら……」

蓮の声が、わずかに低くなった。

「お前は、俺に従え」

遼の背筋を、何かが走った。恐怖ではない。もっと熱い、もっと危険な感覚。

「……いいですよ」

遼が答えた。蓮の目が、わずかに見開かれた。

「後悔するなよ」

「しません。それに……」

遼が、さらに一步近づいた。30センチ。蓮を見上げる角度。だが、遼の目には、何の恐れもなかった。

「勝つのは、俺ですから」

蓮の喉が、わずかに動いた。何かを飲み込むような動き。

二人は、そのまま数秒間、動かなかった。シャワールームの湿気、タイルの冷たさ、そして二人の身体から立ち上る熱。すべてが混ざり合って、奇妙な緊張感を作り出していた。

遼が先に動いた。蓮の横を通り過ぎ、更衣室へ戻る。その際、また肩が触れた。今度は、さっきよりも長く。

蓮は、その場に立ち尽くしていた。

＊

夜、自宅に戻った遼は、ベッドに寝転がっていた。天井を見つめながら、今日の出来事を反芻する。

蓮の顔。

あの表情。

あの声。

あの身体。

遼は目を閉じた。蓮の身体が脳裏に浮かぶ。濡れた肌、盛り上がった筋肉、そして……あの視線。

遼の身体が、わずかに熱くなる。

……何だ、これは。

競争心か。それとも……。

遼は寝返りを打った。パジャマの下、身体がわずかに反応している。それを認識して、遼は小さく舌打ちした。

勝ちたい。

蓮に。

あの完璧な身体を。あのプライドを。すべてを手に入れたい。

屈服させたい。

自分の下に。

遼の手が、無意識に自分の身体を撫でた。腹筋の上を滑り、そして下へ。

……ダメだ。

遼は手を止めた。深呼吸をする。落ち着け。これは、ただの競争心だ。スポーツへの情熱だ。

でも、心の奥で、小さな声が囁いていた。

.....本当に？

遼は目を開け、天井を睨みつけた。

賭け。

勝ったら、蓮は従う。

.....どう従わせようか。

遼の唇が、暗闇の中で歪んだ。

＊

翌日の練習は、いつもより重い空気が流れていた。遼と蓮の

「賭け」の話は、すぐにチーム全体に広まっていた。

「マジで一対一やるの？」

「葛城、大丈夫かよ.....相手、氷室だぞ」

「でも昨日の試合、葛城すごかったしな」

チームメイトたちのひそひそ話。遼は無視して、黙々とストレッチをしていた。

体育館の反対側では、蓮も一人でウォーミングアップをしていた。時折、遼の方を見る。その視線には、昨日とは違う何かがあった。

監督が手を叩いた。

「よし、集合！」

選手たちがコート中央に集まる。監督は腕を組んで、全員を見渡した。

「昨日の試合、よくやった。特に葛城、お前のあのゴールは素晴らしかった」



「ありがとうございます」

遼が頭を下げる。監督は続けた。

「だが、調子に乗るな。全国大会はもっと厳しい。今日の練習、手を抜くな」

「はい！」

全員が声を揃える。監督は満足そうに頷き、そして言った。

「それから……葛城と氷室。お前ら、一对一の勝負がしたいんだってな」

場がざわついた。遼と蓮が、同時に監督を見る。

「練習試合でやれ。今から。全員、それを見てろ」

「え……」

「今、ですか？」

遼と蓮が、同時に声を上げた。監督はニヤリと笑った。

「ああ。お前ら、本気なんだろう？ だったら、今やれ。皆の前で」

遼の心臓が跳ねた。予想外の展開。だが、悪くない。むしろ……。

遼は蓮を見た。蓮も遼を見ていた。二人の視線が交差し、そして同時に頷いた。

「分かりました」

「やりましょう」

監督は満足そうに頷き、コート of 準備を指示した。

＊

コート中央。遼と蓮が向かい合っている。周囲には、チームメイト全員が円を作って見守っていた。

ルールは簡単。ボールを持った方が攻撃。先に3点取った方の勝ち。

ボールは、最初、蓮が持った。

「行くぞ、葛城」

「来てください」

蓮が動いた。大きな身体、だが動きは速い。遼は低い姿勢で待ち構える。

蓮がフェイントをかける。右に動くふりをして、左へ。だが、遼は騙されなかった。すぐに反応し、蓮の前に立ちはだかる。

蓮の目が、わずかに見開かれた。

二人の身体が接触する。蓮の大きな身体が、遼を押しつけようとする。だが、遼は踏ん張った。小柄な身体に、驚くほどの力が込められている。

「くっ……」

蓮が唸る。遼は蓮の腕に手を伸ばし、ボールを奪おうとする。指先が、蓮の汗ばんだ肌に触れる。

その瞬間、また電流のような感覚。

蓮の身体が、わずかに硬直した。その隙を、遼は逃さなかった。すばやくボールをカット、そのままシュート。

ボールがゴールに吸い込まれる。

「1-0！」

チームメイトたちから歓声が上がる。遼は無表情で、蓮を見た。

蓮の顔には、明らかな動揺があった。

「次、行きます」

遼がボールを拾い、蓮に投げる。蓮はボールをキャッチし、深呼吸をした。

もう一度、勝負。

今度は蓮が慎重に攻める。フェイントをかけず、力で押し切ろうとする。大きな身体が遼に向かってくる。

遼は横に避けようとしたが、蓮の手が伸びてきた。遼の腰を掴む。

二人の身体が密着する。

遼の背中に、蓮の胸が押し付けられる。熱い。蓮の吐息が、遼の首筋にかかる。

「.....っ」

遼の身体が、わずかに震えた。

蓮はそのまま、力任せにシュート。ボールがゴールに入る。

「1-1！」

蓮は遼から離れた。だが、その目には、何かが宿っていた。

遼は、自分の首筋に残る感覚を意識していた。蓮の吐息。熱。匂い。

.....集中しろ。

遼は頭を振った。

次、遼の攻撃。

遼はボールを持ち、蓮と向き合った。今度は、遼から仕掛ける。

素早いドリブル。蓮が反応する。遼は蓮の右側を抜こうとする。だが、蓮はそれを読んでいて、大きな手が伸びてくる。

遼の肩を掴む。

また、密着。

今度は、正面から。遼の顔が、蓮の胸のすぐ近くにある。蓮の心臓の音が聞こえる。速い。

遼は顔を上げた。蓮を見上げる。蓮も遼を見下ろしている。

距離、10センチ。

二人の息が、混ざり合う。

「.....葛城」

蓮が、低く囁いた。遼の名前。それは、呼びかけなのか、それとも.....。

遼は答えなかった。ただ、蓮の目を見つめた。

そして、一瞬の隙を突いて、ボールを蓮の股下を通した。すぐに蓮の横をすり抜け、ボールをキャッチ、シュート。

ゴール。

「2-1！」

チームメイトたちが歓声を上げる。だが、遼の耳には届いていなかった。遼の意識は、すべて蓮に向けられていた。

蓮は、その場に立ち尽くしていた。肩で息をしている。汗が額を伝う。そして、その目には.....。

悔しさ。

そして、何か別の感情。

遼には、それが何なのか、分からなかった。でも、確かに感じていた。

.....もっと。

もっと、追い詰めたい。

最後の勝負。蓮の攻撃。

蓮はボールを持ち、遼と向き合った。もう、余裕はなかった。本気目。本気の動き。

蓮が突進してくる。全力で。遼は避けようとしたが、蓮の速さは予想以上だった。

遼の身体が、コートの手前まで押されていく。背中が壁に当たる。

蓮が覆いかぶさるように、遼の前に立つ。ボールを持ったまま、遼を壁に押し付ける形。

完全に、逃げ場がない。

蓮の顔が、遼のすぐ近くにある。距離、5センチ。

「.....終わりだ」

蓮が囁いた。その声には、勝利の確信があった。

だが、遼は諦めなかった。

壁に押し付けられたまま、遼は蓮の腕に手を伸ばした。必死に、ボールを奪おうとする。

二人の身体が、さらに密着する。胸と胸が押し付けられる。足が絡み合う。

蓮の目が、わずかに揺れた。

遼の指が、蓮の手首を掴む。力を込める。蓮の手から、ボールが離れかける。

「くっ.....」

蓮が唸る。遼も唸る。二人の顔が、さらに近づく。

距離、3センチ。

お互いの吐息が、顔にかかる。熱い。遼の心臓が、激しく脈打つ。蓮の心臓も、同じように打っているのが分かる。

そして。

監督の笛が鳴った。

「そこまで！ ファウル！ 氷室、押しすぎだ！」

二人は、はっとして離れた。蓮が一步下がる。遼は壁から離れ、息を整えた。

「葛城のフリースロー！ 決めたら葛城の勝ちだ！」

チームメイトたちがざわつく。遼はボールを受け取り、ゴール前に立った。

深呼吸。

ゴールを見る。

そして、シュート。

ボールが、綺麗な放物線を描いて、ゴールに吸い込まれた。

「3-1！ 葛城の勝ち！」

歓声。拍手。チームメイトたちが遼に駆け寄る。

だが、遼の目は、蓮だけを見ていた。

蓮は、コートで、ただ立ち尽くしていた。肩を落とし、床を見つめている。

完璧なエースの、初めての敗北。

遼は、ゆっくりと蓮に近づいた。チームメイトたちの声が遠のいていく。

蓮の前に立つ。見上げる。

「氷室先輩」

蓮が顔を上げた。その目には、明らかな動揺と、そして.....何か別の感情。

「賭け、覚えてますよね」

「.....ああ」

「じゃあ」

遼が、小さく笑った。

「従ってもらいますよ」

蓮の喉が、大きく動いた。

## 第2話：賭け

放課後の体育館は、いつもの喧騒に包まれていた。ボールが床を叩く音、選手たちの掛け声、笛の音。だが、葛城遼の耳には、それらすべてが遠い音楽のようにしか聞こえなかった。

遼の視線は、コートの反対側にいる氷室蓮に釘付けになっていた。

あれから三日が経った。一対一の勝負で、遼は蓮に勝った。賭けに勝った。だが、その後、二人の間には奇妙な距離が生まれていた。

蓮は、遼を避けるようになった。練習中も、必要最低限の会話しかしない。目も合わせない。まるで、遼の存在を認めたくないかのように。

でも、遼には分かっていた。

蓮は、逃げている。

賭けから。約束から。そして.....何か別のものから。

遼の唇が、わずかに歪んだ。

.....逃がさない。

練習が一段落ついた時、遼は監督に声をかけた。

「監督、少し用具室を整理してきます」

「ああ、頼む。最近散らかってるからな」

遼は頷き、コートを離れた。用具室へ向かう途中、チームメイトの一人に声をかけた。

「氷室先輩に、用具室に来るように伝えてもらえますか？」

「え？ 氷室に？」

「はい。手伝ってほしいことがあるので」

「あ、うん、分かった」

チームメイトは怪訝な顔をしたが、蓮のところへ向かった。遼は、その様子を一瞥してから、用具室の扉を開けた。

＊

用具室は、体育館の隅にある小さな部屋だった。広さは四畳半ほど。壁際には棚が並び、ボール、ネット、コーン、その他の用具が雑然と置かれている。窓はなく、換気扇だけが低い音を立てて回っていた。

遼は扉を閉め、部屋の奥へ進んだ。棚の間の狭いスペース。埃っぽい空気。古いゴムと汗の混ざった匂い。

遼は深呼吸をした。心臓が、いつもより速く打っている。

.....落ち着け。

だが、落ち着けなかった。これから起こることを想像すると、身体の奥が疼く。

扉がノックされた。

「葛城、いるのか」

蓮の声。遼は小さく「はい、どうぞ」と答えた。

扉が開き、蓮が入ってきた。練習着姿。汗で濡れたTシャツが、鍛え上げられた身体のラインを際立たせている。

蓮は遼を見つけ、眉をひそめた。

「何の用だ」

「手伝ってほしいことがあって」

「.....何を」

遼は答えず、扉に手を伸ばした。鍵をかける。

カチャリ。

その音が、狭い部屋に響いた。

蓮の表情が変わった。

「おい、何を.....」

「氷室先輩」

遼が、蓮の目を真っ直ぐ見た。

「賭け、覚えてますよね」



蓮の顎に、力が入った。

「.....何の話だ」

「とぼけないでください。俺が勝ったら、先輩は俺に従う。そういう約束でした」

「それは.....」

「まさか、忘れたとは言わせませんよ」

遼が一步、近づいた。蓮との距離が縮まる。蓮は後ずさりしようとしたが、背中が柵に当たった。

「お前.....本気で言ってるのか」

「はい」

遼が、さらに近づく。蓮を見上げる角度。だが、遼の目には、何の恐れもなかった。

「何を、させる気だ」

「何だと思えますか？」

遼の声は、静かだった。だが、その中には、はっきりとした意志があった。

蓮は、遼を睨みつけた。だが、その目には、明らかな動揺があった。

「まさか.....お前」

「まさか、何ですか？」

遼の唇が、わずかに歪んだ。挑発的な笑み。

蓮の拳が、震えた。

「舐めるな。俺は.....」

「俺に、負けましたよね」

遼が、蓮の胸に手を置いた。Tシャツ越しに、硬い筋肉の感触。そして、速い心拍。

蓮の身体が、わずかに硬直した。

「お前……」

「先輩、心臓、速いですね」

遼が、ゆっくりと手を動かした。蓮の胸筋の上を、指先が滑る。汗で濡れたTシャツが、肌に張り付いている。

蓮の呼吸が、わずかに乱れた。

「やめろ」

「嫌です」

遼の手が、さらに下へ。腹筋の上を撫でる。固い。盛り上がった筋肉。一つ一つの輪郭が、Tシャツ越しにはっきりと分かる。

「葛城……」

蓮の声が、わずかに震えた。遼は、それを聞き逃さなかった。

「先輩、声、震えてますよ」

「う、うるさい……」

「怖いんですか？」

「誰が……」

蓮が遼の手を掴もうとした。だが、遼は素早く避けた。そして、蓮の腰に手を回した。

蓮の身体が、びくりと震えた。

「っ……」

「どうしました？」

遼が、顔を近づけた。蓮の首筋に、鼻先を近づける。汗の匂い。そして、男の体臭。

遼は、深く息を吸った。

「先輩、いい匂いですね」

「ふざけ……んな」

蓮が遼を突き飛ばそうとした。だが、遼は蓮の腰をしっかりと掴んでいた。逆に、二人の身体が密着する形になった。

胸と胸が押し付けられる。蓮の身体は大きく、硬く、そして熱い。遼の小柄な身体が、蓮の身体に包まれるようだった。

だが、主導権は、遼が握っていた。

「先輩」

遼が、蓮の耳元で囁いた。

「今から、俺に従ってもらいますよ」

蓮の身体が、大きく震えた。

「や、やめ……」

「嫌だと、言わないでください」

遼の手が、蓮の背中を撫でた。広い背中。汗で濡れたTシャツ。その下の、盛り上がった筋肉。

遼の指先が、蓮の背骨をなぞる。上から下へ。ゆっくりと。

蓮の背中が、わずかに反った。

「あ……」

小さな声。それは、拒絶ではなかった。

遼の唇が、さらに歪んだ。

……いける。

遼は、蓮の身体を押して、部屋の奥へと導いた。蓮は抵抗しなかった。いや、できなかった。

部屋の一番奥。棚と壁の間の狭いスペース。ここなら、外から見えない。

遼は、蓮をそこに立たせた。壁を背にした蓮。逃げ場はない。

「葛城……本気なのか」

蓮が、震える声で聞いた。遼は、蓮の目を真っ直ぐ見た。

「はい。本気です」

「俺は……」

「先輩は、俺に従う。約束でしたよね」

遼が、蓮のＴシャツの裾を掴んだ。ゆっくりと、持ち上げる。

蓮の腹筋が露わになる。汗で濡れた肌。六つに割れた筋肉。その下、ショートパンツのウエストライン。

遼は、そこに指先を這わせた。

「っ……！」

蓮の身体が、びくりと跳ねた。遼は、指先をウエストラインに沿って動かした。右から左へ。ゆっくりと。焦らすように。

蓮の呼吸が、明らかに荒くなった。

「はあ……はあ……」

「先輩、もう、こんなに……」

遼の視線が、蓮のショートパンツの股間部分に向けられた。そこには、明らかな膨らみがあった。

蓮の顔が、真っ赤になった。

「見るな……」

「なんでですか？」

遼が、その膨らみに手を伸ばした。指先が、布越しに触れる。

蓮の身体が、大きく震えた。

「あ……っ！」

声が漏れた。それは、今までの蓮からは想像できないような、弱々しい声だった。

遼は、その声を聞いて、身体の奥が熱くなるのを感じた。

……もっと。

もっと、この声を聞きたい。

遼の手が、蓮の股間を優しく撫でた。布越しに、硬さが伝わってくる。大きい。熱い。そして、びくびくと震えている。

「先輩、すごく……硬いですね」

「う、うるさい……」

「触られて、嬉しいんですか？」

「ち、違う……」

「じゃあ、なんでこんなに大きくなってますか？」

遼の指が、その膨らみの輪郭をなぞった。長さ、太さ、先端の形。すべてを確認するように。

蓮の手が、壁を掴んだ。爪が、わずかに壁に食い込む。

「や……やめ……」

「やめてほしいんですか？」

遼の手が、止まった。蓮は、必死に息を整えながら、答えようとした。

「あ……ああ……」

「本当に？」

遼の手が、再び動き出した。今度は、少し強く。布越しに、蓮のモノを握る。

「あああっ……！」

蓮の声が、大きくなった。遼は、すぐに蓮の口を手で塞いだ。

「静かに。外に聞こえますよ」

蓮の目が、大きく見開かれた。遼の手が、蓮の唇を押さえている。その感触。柔らかく、熱い。

遼は、もう片方の手で、蓮のショートパンツの中に手を入れた。

直接、肌に触れる。

蓮の身体が、大きく跳ねた。

「んっ……！」

遼の手の下で、蓮の声が押し殺されている。遼は、蓮の中で硬く膨らんだモノを握った。

熱い。硬い。そして、大きい。

遼の手の中で、それはびくびくと脈打っていた。

遼は、ゆっくりと手を動かした。上下に。根元から先端へ。そして、また根元へ。

蓮の身体が、震え始めた。全身が、小刻みに震えている。

「んん……んっ……」

口を塞がれたまま、蓮は声を出そうともがいていた。だが、遼の手は離れなかった。

遼の手の動きが、徐々に速くなる。蓮のモノを、しっかりと握りしめて、上下に動かす。

先端から、何か粘つくものが溢れてきた。それが、遼の手を濡らす。

「先輩、もう……こんなに出てますよ」

遼が、蓮の耳元で囁いた。蓮の顔は、もう真っ赤だった。目には、涙が浮かんでいた。

それは、苦痛の涙ではなかった。

遼は、口を塞いでいた手を離した。

「はあ……はあ……はあ……」

蓮が、大きく息を吸う。肩で息をしている。汗が、額から顎を伝い、首筋を滑り落ちる。

「先輩、気持ちいいですか？」

遼が聞いた。蓮は答えなかった。いや、答えられなかった。ただ、荒い息を繰り返すだけ。

遼の手は、止まらなかった。蓮のモノを、リズミカルに扱う。

蓮の手が、遼の肩を掴んだ。

「ま、待て……」

「待てません」

「も、もう……限界……」

「じゃあ、イってください」

「こ、こんなところで……」

「大丈夫ですよ。俺が、受け止めますから」

遼が、そう言って、蓮の前に屈んだ。

蓮の目が、さらに大きく見開かれた。

「お、おい、お前……まさか……」

遼は、蓮のショートパンツを完全に下ろした。

蓮のモノが、遼の目の前に現れた。

大きい。太い。先端は赤く腫れ上がり、透明な液体が溢れている。血管が浮き出て、全体が硬く反り返っている。

遼は、それを間近で見つめた。

……綺麗だ。

遼の舌が、唇を湿らせた。

「や、やめろ……そんな……」

蓮が、遼の頭を押さえようとした。だが、力が入らなかった。

遼の手が、蓮のモノを優しく握った。そして、舌を伸ばした。

先端に、舌尖が触れた。

「あゝ ああっ……！」

蓮の声が、部屋中に響いた。身体が、大きく反った。

遼の舌が、先端を舐める。溢れ出した液体を、味わうように。少し苦く、少し甘い。

遼は、さらに舌を這わせた。先端から、カリの部分へ。そして、下へ。

蓮の手が、遼の髪を掴んだ。

「だ、ダメだ……もう……」

「先輩、我慢してください」

遼が、顔を上げて言った。唇が、蓮のモノで濡れている。

「が、我慢なんて……」

「だって、まだ、ちゃんと舐めてないですから」

遼が、再び顔を近づけた。今度は、口を開けて、蓮のモノを咥えた。

「うああああっ……！」

蓮の声が、悲鳴のようになった。遼の口の中、熱く、柔らかく、そして濡れている。

遼は、ゆっくりと頭を動かした。前後に。蓮のモノを、口の中で転がすように。

舌を使って、裏筋を舐める。先端をつつく。カリの部分を、唇で挟む。

蓮の身体が、完全に震えていた。立っているのがやっとという状態。壁に手をついて、何とか支えている。



「ま、まずい……も、もう……」

蓮の声が、切羽詰まっている。遼は、それを感じて、さらに激しく動いた。

頭を前後に振る。蓮のモノが、喉の奥まで届く。えずきそうになるが、我慢する。

手で、根元を握る。そして、上下に動かす。口と手、両方で、蓮を責める。

「あ、ああ、ダメだ……出る……出る……！」

蓮の手が、遼の頭を強く押さえた。遼の口の中で、蓮のモノが、さらに大きく膨らんだ。

そして、次の瞬間。

「うああああっ……！」

蓮の身体が、大きく痙攣した。遼の口の中に、熱いものが溢れ出した。

大量の精液。それが、遼の喉の奥に流れ込む。

遼は、必死にそれを飲み込んだ。一度、二度、三度。蓮の射精は、なかなか終わらなかった。

ようやく、蓮の身体から力が抜けた。壁に背中を預けて、がくりと膝が折れる。

遼は、口を離した。唇の端から、白濁した液体が垂れる。遼は、それを手の甲で拭った。

「はあ……はあ……」

蓮が、荒い息をしている。顔は真っ赤で、汗びっしょり。目は虚ろで、焦点が合っていない。

遼は、蓮の顔を見上げた。

……完璧なエースが、こんな顔をするなんて。

遼の身体が、熱く疼いた。自分のショートパンツの中も、硬く膨らんでいる。だが、遼はそれに触れなかった。

今は、蓮だけを見ていたかった。

「先輩」

遼が、蓮の名を呼んだ。蓮は、ゆっくりと遼を見た。

「気持ちよかったですか？」

蓮は、答えなかった。ただ、顔を背けた。

でも、その耳が、真っ赤になっているのを、遼は見逃さなかった。

遼は、立ち上がった。そして、蓮のショートパンツを上げてやった。

「先輩、これで……俺の言うこと、聞いてくれますよね」

蓮は、しばらく黙っていた。そして、小さく、とても小さく、頷いた。

遼の唇が、満足そうに歪んだ。

＊

用具室を出ると、練習はまだ続いていた。遼は、何事もなかったかのように、コートに戻った。

数分後、蓮も戻ってきた。顔はいつもの冷静さを取り戻していたが、その目は、どこか虚ろだった。

チームメイトたちは、二人の様子を不思議そうに見ていた。

「お前ら、何してたんだ？」

「用具室の整理です」

遼が、さらりと答えた。蓮は、何も言わなかった。

練習が再開される。だが、蓮のプレーは、いつもより精彩を欠いていた。ボールをキャッチミスしたり、シュートを外したり。

監督が、心配そうに声をかけた。

「氷室、どうした？ 体調悪いのか？」

「い、いえ……大丈夫です……」

蓮が、ぎこちなく答える。だが、その顔は、まだ少し赤かった。

遼は、それを見て、小さく笑った。

.....まだまだ、始まったばかりだ。

練習が終わり、更衣室に戻る。遼は、いつものように黙々と着替えをしていた。

ふと、視線を感じた。

顔を上げると、蓮がこちらを見ていた。

二人の目が合う。

蓮は、すぐに視線を逸らした。だが、その頬が、わずかに赤く染まっているのが分かった。

遼は、何も言わなかった。ただ、着替えを続けた。

でも、心の中で、遼は思っていた。

.....次は、どうしようか。

どこで。

どんなふうに。

遼の身体が、またわずかに熱くなった。

＊

その夜、遼は自宅のベッドで横になっていた。天井を見つめながら、今日の出来事を思い返す。

用具室での、あの時間。

蓮の顔。声。身体。すべてが、脳裏に焼き付いている。

あの時の蓮は、完璧なエースではなかった。ただの、弱い人間だった。

でも、それが、たまらなく魅力的だった。

遼の手が、自分の身体を撫でた。腹部を滑り、そして下へ。

ショートパンツの中、まだ硬いままのモノを握る。

遼は、目を閉じた。蓮の顔が浮かぶ。あの乱れた表情。あの震える声。

「はあ……」

遼の息が、荒くなる。手が、自分のモノを扱き始める。

……次は。

次は、もっと。

もっと、蓮を追い詰めたい。

あの完璧な身体を。

あのプライドを。

すべてを。

遼の手の動きが、速くなる。呼吸が乱れる。身体が熱くなる。

そして、数分後。

遼は、一人、静かに果てた。

天井を見つめながら、遼は思った。

……合宿が、楽しみだ。

来週から始まる、三泊四日の合宿。そこで、蓮と、たっぷり時間を過ごせる。

遼の唇が、暗闇の中で歪んだ。

### 第3話：逆転

バスが山道を登っていく。窓の外には、深い緑が広がっていた。葛城遼は、窓際の席に座り、流れる景色を眺めていた。

合宿初日。チーム全員が、山奥の合宿所へ向かっている。三泊四日の強化合宿。全国大会に向けた、最後の仕上げ。

遼の視線が、ふと、前方の席に移った。

そこには、氷室蓮が座っていた。

あれから一週間。用具室でのあの出来事以来、蓮は遼を完全に避けるようになった。目も合わせない。話しかけても、必要最低限の返事しかない。

でも、遼には分かっていた。

蓮は、忘れていない。

あの感覚を。あの屈辱を。そして……あの快楽を。

バスが揺れた。蓮の肩が、わずかに動く。遼は、その動きを見逃さなかった。

……今夜。

今夜、また、続きをしよう。

遼の唇が、わずかに歪んだ。

＊

合宿所は、山の中腹にある古い施設だった。木造二階建て。周囲には何もなくて、ただ森が広がっているだけ。

「うわ、マジで何もねえな」

「これぞ合宿って感じだな」

チームメイトたちが、口々に言う。監督が、全員を集めて説明を始めた。

「部屋は二人一組だ。リストを読み上げるから、確認しろ」

監督が、紙を読み上げていく。遼は、自分の名前が呼ばれるのを待っていた。

「葛城と……高橋」

遼の隣で、チームメイトの高橋が

「よろしく」と声をかけてきた。遼は小さく頷いた。

そして、次の瞬間。

「氷室と……佐藤」

遼の視線が、蓮に向いた。蓮は、無表情で監督の話を聞いていた。

……同じ部屋じゃないのか。

遼は、わずかに舌打ちしそうになったが、我慢した。

まあいい。どうせ、機会はある。

＊

荷物を部屋に置き、夕食までの自由時間。遼は、施設の中を歩き回っていた。

一階には、食堂、談話室、トレーニングルーム。二階には、客室が並んでいる。そして、一階の奥には……。

大浴場。

遼は、その扉の前で立ち止まった。中を覗くと、広い浴室が見えた。タイルの床、大きな浴槽、シャワーが並ぶ壁。そして、片隅には、大きな鏡。

……ここか。

遼は、扉を閉めて、施設の探索を続けた。

＊

夕食は、賑やかだった。チームメイトたちが、明日からの練習について話している。監督も、珍しく笑顔で選手たちと会話していた。

遼は、黙々と食事をしていた。時々、蓮の方を見る。蓮も、静かに食事をしていた。

食後、監督が立ち上がった。